

14. 口腔癌遠隔転移症例について

原田雅弘, 田代圭祐, 横田 剛
成川芳明 (千大)
金澤春幸 (君津中央)

遠隔転移の発現は, 311例中31例, 10.0%であった。原発部位は硬口蓋, 口底, 下顎歯肉の順で, 扁平上皮癌は分化度が低くなると, 発現が高くなる傾向を示した。未分化癌は44.4%と高い転移率を示した。T因子が大きくなると, 遠隔転移が増加した。顎下リンパ節に転移を認めたものは, 転移, 生存期間が短かった。1年以内に74.2%が遠隔転移し部位は肺が多かった。局所非制御例が多く, 極めて予後不良であった。

15. 顎骨中心性扁平上皮癌の1例

鈴木智弘, 野本昌良, 三橋 衛
宮内健晋 (千大)
馬橋敏紀 (千葉労災)

患者は53才男性で初診2か月前より8相当部歯肉に慢性腫脹と間歇的鈍痛を自覚したため来院。同部には慢性の膨隆を認めたが潰瘍等の所見は見られなかった。X線所見では顎骨中心性にX線透過像を認め, 舌骨皮質骨に一部破壊像を認めた。生検を行った結果, 中等度分化型扁平上皮癌であった。下顎骨区域切除術, 右全頸部郭清術, 腸骨移植による下顎骨再建術を施行した。術後1年4カ月経過し再発等認めていない。

16. 当科における顎下腺多形性腺腫症例の検討

秋葉次野, 吉田成秀, 小野可苗
永嶋昌之, 渡辺俊英 (千大)

1977年から1997年の20年間に当科で処置した頭頸部多形性腺腫は39例, うち顎下腺多形性腺6例について検討した結果, 発生部位は右側に多く, 男女比では女性に多かった。初診時平均年齢は42.2才であり, 病歴期間は約3年で腫瘍の大きさは30mm以上のものが多かった。受診動機は顎下部の腫脹を第三者に指摘された例が多く, また6例の初診時臨床診断は多形成腺腫1例, 顎下腺炎1例, 顎下腺腫瘍4例であった。

17. 疣贅型黄腫の1例

石部元朗, 田中孝佳, 磯田 淳
広田実可子, 内田貴士, 三橋建夫
工藤逸郎 (日大・歯・口外1)

今回我々は下顎舌側歯肉を生じた疣贅型黄色腫の1例を経験したので報告する。

患者: 45歳女性。主訴: 右下大臼歯部の腫脹。

現症: 6舌側歯肉に5×3mm大の楕円形で境界明瞭な、丘状の腫瘍を認める。表面は黄色で小砂状を呈する。

処置及び経過: 局麻舌に周囲の健康組織をわずかに付し, 骨膜とともに切除した。現在術後, 4.5か月経過するも再発等の徴候は認めない。

病理診断: 疣贅型黄色種

18. 巨大な myoepithelioma の1例

江上史倫, 川上譲治, 内田暢彦
江藤壽孝, 金澤正昭
(北海道医療大・歯・口外1)

今回, 私たちは, 口蓋骨を破壊・吸収し, 鼻腔および上顎洞に浸入増殖した巨大な myoepithelioma の1例について報告した。患者は, 57歳の男性で, 30年前に腫瘍に気づき, 漸次増大し続けるもそのまま放置していた。

初診時, 右側の軟口蓋から硬口蓋の範囲に直径55mm, 無痛性の鶏卵大, 楕円形で有茎性, 弾性軟の腫瘍を認めた。腫瘍切除術を施行した。腫瘍の大部分は plasmacytoid cell から成り, 骨との界面の一部分では, 腫瘍細胞の骨への浸潤像を認めた。また, 細胞質内に多数の myofilamentous element を認めた。以上より, 口蓋部の malignant myoepithelioma と診断した。

19. 舌扁平上皮癌 SAS の PI3 Kinase を介する FAK のチロシンリン酸化と運動促進

奥村一彦, 中村公則, 田中真樹
荻野 司, 金澤正昭
(北海道医療大・歯・口外1)

口腔扁平上皮癌細胞の湿潤を規定する因子のなかで最も重要である因子として細胞振動能力が挙げられる。運動能の異なるクローンを用いて, この運動促進シグナルを検討したところ, 血清刺激にたいして高運動性クローンは PI3 kinase 活性化がみられ, これとともに FAK のチロシンリン酸化が生じたが, 低運動性クローンでは変化がなかった。さらに PI3 kinase 阻害剤により高運動性クローンのみ細胞運動が抑制された。

20. Mouse thymic cell line (IT-76MHC) における poly Ig receptor (SC) の発現

吉村 誠, 相崎邦雄, 西村 敏
岩成進吉, 工藤逸郎
(日大・歯・口外1)
小宮山一雄 (同・病理)

マウス胸腺上皮株化細胞 (IT-76MHC) を用い, 主に SC について検索し, 以下の結果を得た。